

かしら、それとも五十銭かしら、五十銭、五十銭、きつとさうよ。一圓かもしれないわ。一圓、一圓、きつとさうよ。このひとはいい人よ。」と考へてゐるうちに、男は金を拂つて、ぎいいと、ドアのそとへ消えてしまふのであつた。テーブルの上にはトンカツの死體と、コオヒイ皿と、それに賣藥の印紙のやうな二十銭札が投げ出されたのが、自然に皺をのばしながら、まるで毛虫のやうにうごめいてゐるのであつた。

雪子はすぐ期待をうらぎられて、ちつと變なかほをしたが、「あんな人はあれだけのものだわ。服の肘が抜けてゐたんだもの。」と心で呟やくと、すぐ女給溜りへ引き返すのであつた。かの女はそこで讀みさしの、幹彦氏の小説の頁をさらさら雪のやうな手つきで繰るのであつた。けれどもやはり雪子はたえずガマ口のなかに無難作につき込んだボロ切れのやうな紙幣のことで頭が一杯になるのであつた。それを朋輩の目の前でかぞへることは恥らつてゐるので、たいがいは家へかへつてからする

のである。「二十銭五十銭八錢一圓……。」といふ數字が、ひよいひよいとタイプライターのやうに浮んでくるのである。

その雪子はいまでも居る。上野廣小路からちよつと曲つた通りに——ことに月の美しい晩はいつも窓から覗いてゐる。髪はれいのくしやくしやなひつぱりつけで、家へかへると平常内内で活動女優の繪葉書を見い見い、額の方を蔽ふのであつた。けふは左かと思へば、明日は右の方へ指さきて揉んだらしくへし伸してゐるのであつた。それに彼女の西洋崇拜は悉く活動寫眞の影響で、その歩き振りなどは努めて早足で、たつたつと馳るやうに、たとへば西洋婦人が高い石壇へでも登るときにするやうな歩きぶりをするのであつた。その他彼女の手製のオペラバックを見れば、その下け緒の極めて長いのを見ても、直ぐ彼女の西洋崇拜がわかるのである。

彼女のオペラバックなるものは、麻ともツツク地とも孰つちでも見えるところの一種の南京米の袋地のやうなもので、それに、赤い一莖のチュリップの刺繡がしてあつ

た。それは或る日美術學校の生徒にかいてもらつたのを、彼女がトンカツヤやコオヒイを搬ぶ閑暇をぬすんで刺繡したものであつた。なかには、紙おしろい懐中鏡ハシカチーフその他れいのガマ口などが入れられてあつた。

「わたし、ちよいとメリーマクラレンに似てゐなくつて。」などと、飛んでもないことを言ふのであつた。マクラレンの上品さが彼女にあらう筈がない。せいぜいで喜劇俳優のマリーブレボースト位の、それすらも彼女にはないのであつた。なる程彼女の豊頬と紅みとは年の若いせいで人なみであるが、その眼つきは小利巧けに素ばしこくて栗鼠のやうであつた。マクラレンがトンカツの臭氣に染みてゐることなど考へられないわけである。

「あ、似てゐるよ、メーベル、ノーマンドにも似てゐるよ。」と、れいの活動通の文科の生徒がいふのであつた。彼女は、すぐ然う信じてしまつて、

「ノーマンドの眼はいいわね。わたし、ほんとに惚れ惚れするわ。」と褒めるのであつた。實際のところ彼女のからだのうちで探るべきものは、八圓なにがしの紅い珠のついた指輪の箆められてゐる手くらゐのもので、しかも何處かコーヒイの匂ひやスチュの汁が染み込んでゐる指さきであつた。しまひに彼女が文科の生徒と話した最後には、

「わたし西洋へゆきたいわ。洋服をきて細い靴をはいたら怎麼い氣持でせう。わたし本統におかねがあつたら西洋へ行きたいわ。」と言ひ出すのである。

「西洋へ行つても給仕女をする氣かい。それなら譯はないが。」と文科の生徒もときどき皮肉るのであるが、當の本人は平氣な顔をして、

「給仕女でもいいわ。西洋へさへ行けたら何したつていいわ。」

と、彼女はもう有頂天になつて、きらきらと目を光らせるのであつた。けれども、やはり帳場へ向つて、

「え、テキ一枚、コーヒイ一つ。」と、百舌のやうな聲で叫ばなければならなかつた

のであつた。

「西洋でもカツレッツはカツレッツつて言ふんでせうか。それとも別に名前があるのでせうか。」と言ひ出したのには、さすがの文科生も笑ひ出してしまつて、

「カツレッツは何處へ行つたつてカツレッツだよ」と、恰も彼女の無學を憫れむやうに言ふのであつた。彼女はちよいと考へるやうな目つきをして、

「さう、やはりカツレッツつて言ふの。でもおかしいわね。」と、腑に落ちないかほをするのである。「ぢや、ビフテキもカツレッツもみんな同じいんですわね。」と言ふのであつた。

「カツレッツつてのは、佛蘭西語ではコトレットと言ふんだよ。カツレッツつてのは英語だからね。」と、文科生は、すこし思ひ上つたやうに言ふのである。雪子は、

「コトレット——おかしいわね。コトレット！」と彼女は口で言つて、

「ではビフテキは？」と尋ねた。

「ビフテキはビフテックさ。」と文科生は澄して言ふのである。

「ビフテック！ わたし、これから佛蘭西語で言はうかしら。」と彼女はもう物識らしく、コトレットを振り廻すのであつた。折よく直ぐ客があると、彼女はいきなり帳場へ向つて、

「え、コトレット一挺！」と叫んだのには皆が笑ひ出して了つたのであつた。けれども當の本人は比較のおちついて、なかばは戲談らしくはあつたが、なかばは今這入つてきた客の手前もあるので、さつそく「コトレット」を應用したことであつた。客は變な顔をしながらも、思はず微笑ひ出したのである。客も客、フランス文學の翻譯者としてかなり聲名のある詩人F氏であつた。

さて雪子は、そのうち突然、姿を隠してしまつた。何處へ行つたか誰も知らない。カツフェの女中達も「お罷めになつてから一度も便りがありませんよ。」と言つただけ、さつぱり分らなかつたのである。

此處にまた本郷にエランといふカフェエのあつたことを人人は知つてゐるだらう。白い室でどこか床屋のやうな安つばい寒いカッフェであつた。マダム・バタフライのきいきいした蓄音器機にしたで、ここに集まる憂愁なる青年はビイルやコオヒイを飲みながら、この蓄音器に感激しながら一夜を送るものが多かつた。あながちマダム・バタフライに感激してゐるのではなく、ここにお静といふ女がゐるたせいで、お静が夜な夜な、その赤飯のやうな顔を卓の上にするながら、びいんと張つた頬べたを卓の上の林檎と競争させながらゐるたからであつた。

お静も雪子と似たやうに、文學少女であつたのである。カラマーゾフ兄弟をよんでゐると思ふと、ツルゲネフをも讀み、さうかと思ふと晶子さんの歌集もよんでゐたのである。客はたいがい學生で、黒のソフトの紋切型の姿であつた。

「歌をかいて下さいな。なんでもいいわ。」

と、ねちねちした調子で言つて、一冊の手帳を出すのが常であつた。それゆゑ、十

錢の紅茶に例の櫻色の紙幣を置いてゆくものが多かつたのである。彼女はいつも、「桃井先生も竹松先生もいらつしやいましたわ。まだ他に誰誰さんも。」と言つたやうに、すくなくとも少し有名な小説家の名前をならべることによつて、彼女はいつも得得としてゐたのであつた。

ある晩のことである。わたしが何時かの晩、カラマーゾフ兄弟の二七五頁を何氣なく目にいれておくと、つぎの晩も二七五頁を開いてゐた。それから四五日後に、かれは酒をのみながら、

「カラマーゾフは面白いかね。」と問ふと、

「え、おもしろうござんすわ。」

「何頁をよんでゐるのかね。」と何氣ないふうに尋ねると、お静もまだ氣がつかないで、

「二七五頁をよんでゐますの。」と言つて、不意に氣がついたやうに、ちつと差

し向けてゐた彼の目にねぢ伏せられて、すぐ顔をあからめた。しばらくしてから、
 「此處がたいへん面白いんですもの。ですから時々ひらいて見ますの。」と言つて眞
 赤な顔をした。

もう一つ彼女の顔を赤くするのは、一週間に一度づつ、突然に這入つてくる慶應
 の學生が、何にも言はないで帳場からすぐお靜の部室になつてゐる二階へ上つてし
 まふことであつた。それは誰でも彼のカッフエへ行きつけてゐるものの知つてゐる
 ことで、帳場でも、大目に見てゐる男であつた。さういふ時、他に客でもあると、
 彼女はすぐ赤くなつて了ふのである。

「來ましたね。早く二階へ上つたらいいだらう。」冷かし半分にさう客がいふと、お
 靜は、

「まあ、すかないわ。そんなことを言つて。」

と、つんと澄すのであるが、さう言つた手前もあるので急に二階へあがれないで、

苛苛ともぢもぢを續けるのであつた。鼻翼にぢりぢりした膏汗を掻きながら、
 「きんちゃん。早く通しものを持つてゐらつしやいな。」と小さい替女のやうな女給
 を叱り飛ばしたりするのである。

「おい。二階ぢやお待ち兼ねだよ。」と皮肉に高等學校の生徒らしいのが言ふと、

「知らないわ。」と言つて、やはりもぢもぢ遣つてゐるのであつた。しまひに帳場か
 ら、

「靜ちゃん、ちよいと。」と聲がかかつて、初めて二階へ上つてゆくらしいのであつ
 た。

二七五頁を開けたままカラマゾフ兄弟は、空しく西洋葵の鉢のかけに閑却されて
 もはや手にもふれなかつた。

「お靜さん、マダム・バタフライを一つかけないか。」と詩も歌も畫もかく青年が這入
 つてきて言はうものなら、彼女は心から厭さうに、

「すこしレコードが擦れすぎてゐますのよ。」と厭厭ながらかけるのである。へいぜいなれば、口真似の上手な彼女のことゆゑ、さらさら……さらさら……と蓄音器と一しよにうたふのであるが、その日は唄はないばかりか、あたまがきりきり痛んで仕様がなないのである。だから彼女は慶應の學生はすきであるが、かれが歸つたあとで店へ出ることのいやなのは、主として此の蓄音機で、だるい勢力を抜きとられたやうな頭を掻き亂されるからでもあつた。さういふ晩に限つて、蓄音機好きが妙に集まつて、あれをかけるとかこれをやれとか、最後の「美しき天然」までやらされることはとても彼女は卓子のそばに坐つてゐられないのであつた。

「わたし頭がいたくつて……すこし休ましていただきますわ。」と言つて、白服のボーイが氣味悪くにたりと嗤ふのを背後にかんじながら二階へあがつてしまふのであつた。けれども二三日経つと、やはりカラマゾフの二七五頁をひらきながら

「わたし、どこか静かな山の中へ行たいと思ひますわ。山の中で何も考へないでほ

んやりしてゐて暮したいと思ひますの。海岸でもいいわ。」と、どちらでもいいことに言ふのである。

「そしてアリオシヤのやうな人と一しよになりたいと言ふのかね。」と戯談のやうにいふと、

「いえ、一人きりになつてよ。誰も人間のゐないところがいいわ。」と彼女は言つて「人間のゐるところは色色な詰らないことが起るでせう。わたしそんなところは厭なのよ。静かなところが好きなのよ。」と彼女は例のねちねちした調子でいひながらカラマゾフのページをおもちやにばらばらと刎ねるのである。

時時、客がルーチンだとか、ミゼラブルだのを持つてきてやるせいか、彼女のテエブルの横の低い植木臺には、いろいろな詩集や歌集が積みかさねられてゐた。みんなお借りしてゐるのよ。忙しくてよめないんですけれど……。」と言ひながら、これは誰誰さんから借りたのだとか、誰誰さんの詩の作曲されたのだとか言ふのであ

る。それに彼女はねんばりとした足と足とがへばりつくやうな歩きぶりをする癖をもつてゐた。それと同じいやうな赤子のやうに柔らかい手つきは、いつも文學好きの青年に喜ばれてゐたばかりでなく、ほとんど崇拜の的にもなつてゐたのである。それほど令嬢のやうな手つきをして居た。彼女の手帳のなかにかういふ詩がかかれてあつた。

君が手はずしく

君の手は玉のごとし

願くば玉のごとき手の上にわが唇のあらむことを

わが唇をしてしばし憩はしめむことを

ああ玉のごとき手よ

いま接吻せずして何時の日かこれを爲すべき

ああエンゼルの手よ

などと云ふ詩があつた。彼女はこれを示したあとで、「いつでも此の方はコーヒイばかり召しあがつていらつしやるのよ。それでね「カッフエはコーヒイばかり飲むところだよ。くだらないものばかり食つてゐる奴の氣がしれん」などと言つて、いつもコーヒイばかりなのよ。」と微笑つてゐた。

「それは屋根裏詩人といふ奴なんだ。」といふと、

「屋根裏にゐらつしやるの。」とふしぎさうに問ふのである。

「まあ、そんなものだよ。」と言つたが彼女には分らなかつたらしかつた。

それから彼女はしつこく自作の詩や歌の添削を誰にでも頼むのであつた。極くほそいペン文字で書かれたなかで一つ秀れたのを紹介しやう。

テエブルの上のチュリツプ

そなたは何時咲いたか

案内もなしにそなたはしまひに散つてしまふであらう

テエブルの上のチュリップは悲し。

といふのは、當時法科大学にゐた友人がポケットから出して、

「これを君添削してくれつて言ふんだが、どうかね。ものになつてゐるかね。」と私のところに來て言ふのである。私は一と目見るとエランのお静であることが分つたので、

「いや、なかなか上手いよ、美人かね。この作者は。」といふと、かれは、くすくす嗤つて言はなかつた。ただ、

「目白へ行つてゐる女だがね。ちよいと別品だよ。いつかは紹介してもいいよ。」と言ふのである。

それからあとで、いつかエランへ寄ると、同じい詩を私に添削してくれと、れいの、思はせぶりの調子で、ねちねちと言ふのであつた。

「目白の女子大學生だつてこれだけは書けはしないよ。なかなかいいよ。」と、私は

とぼけて褒めると「え、法科大学の方にも見せたんですが、上手いつて言つて下さいましたわ。」と、彼女は安心したやうな顔をするのであつた。

「今にいい詩ができたら、どこかへ紹介してやるつてその方が言つて下さいましたわ。わたし一生懸命に書かうと思ひますのよ。」と、お静はすこし亢奮しながら言つて、

「わたしのやうなものでも詩人になれるでせうか。」とまじめに言ふのである。私は感激したやうな顔をして、

「なれるとも、まあ一生懸命にやるんですね。」とすすめておいたのである。けれども彼はいつも、チュリップとか、セラニウムとかの詩ばかりをかいて、それからそれへと添削してもらつてゐたのであつた。

だが、突然、彼女は姿を隠した。きいてみると、エランの主人と北海道へかけ落ちしてしまつたとのことで、置き去りにされたおかみさんが四五日経つと店を閉つ

た。そのとき、

「へいぜいから食へない子だと思つてゐたんですよ。飛んだ飼犬に手を噛まれました。」

と、これまた噛まれた慶應の學生をつかまへて話してゐた。お静は静かな山の中へ行つたことであらう。

藍
いろの女

藍いろの空気にはさまざまな女が生息してゐた。なかば洋風にこしらへあけた同じ藍いろの著衣は、肘からさがが露き出されるやうになつてゐて、うす暗がりの椅子のすみすみや、重もいカーテンのかけや、階段の上や、その他いたるところの腐れた空氣のなかに、あるものは生白く浮きあがり、あるものは踏み、あるものは重い西洋綴子のカーテンの埃深いかけて、ばちばちする南京豆を嚙つてゐた。かれらは不思議にも、みな一やうに西洋人のやうな大きな目と、色艶のよい皮膚をもつてゐた。唇の先では絶えず「ロオレイ」や「ロオロラ」を交る交るに唱へ、手製のヴァイオリンのやうな悲しげな節をつけてゐた。それらは一度うなつて、自分で耳をすましながら自ら悲しくなると云ふやうな表情で、その聲調は益々哀しげに噎ぶのが

つねであつた。さうかと思ふと、その足や手は階段やドアやカーテンを絞ることになれてゐるせいか、赤子のやうに敏こく、たえず踊つてゐるやうにも思はれた。こころみに彼女らが西部悲劇とかケンタッキー森林を背景にした映畫を見つめるときは、かならず布面の女優が滂沱として流涕するのにつれて、彼女らも思はず涙ぐむのが常であつた。しかし布面にあらはれた女優の大きな黒い瞳の奥から、ありありと流れ出る涙をそのまま、夫が鼻すぢを通つて唇に沁みこんでも決して拭くやうなことがなかつた。さういふ時にでも彼女らはいつちも舞踏でもするやうに、踵でこつこつ敷物を叩くのである。

ときとして彼女らは、その持前の悲しげな表情をしながら、お互にカーテンの間から布面をながめ合つて、いつとなく手を握り合つて涙ぐむときがあつた。それは殆ど偶然にどちらからと云ふこともなく、おたがひの顔を見ないやうにしてさうするのである。

欠

欠

カフェの女給の全然西洋好にひきかへて彼女らは極端な折衷的な變型をしてゐた。夏になると、かれらは概ねその豊かな肥りを見せた胸と肌の一部をあらはして、雑沓の埃ばんだ風になぶらせてゐた。なかには胸もとに、漆黒な黒子を彫るために、その胸もとに墨筆で描くことがあつた。

「さう、似合うわ。ぼつちりと黒くなつて可愛い、わ。」と一人がいへば、また一人はその頸首に入墨のやうな黒星を描いて見せるのであつた。それはこの前の週に、肌に蝶の入墨をした女が、布面にあらはれてから急に彼女の女らの間に流行するのであつた。なかには眉と目の間に、そのほくろを浮ばせるものさへあつた。

それに西洋のことになれば、殆どかれらは極端な西洋崇拜で、たまにコオヒイでも皆で館がはててから飲みに出かけようものなら、きまりきつて、妙な氣取つた手つきで、コオヒイのさじを把るのがつねであつた。

「かういふ風にもつのよ。」

一人が親指と人さし指でさじをもつて言う、こんどは、
「中指もかけるのよ。三本ではさむんだわ。」

と、その圓つこい餅のやうな顔をべたべたとテーブルの上にならべ立てて喋りちらすのであつた。も一つは極端な月光崇拝者であることである。

館街の埃ばんだ窓越しに、ぼんやりした濁つたやうな月が射しこむと、かの女らは凡べてのカフェの女がその崇拜者であるやうに、彼女らも極端な讚美者になるのである。それは彼女らの歌みがたい熱情が、ちやうど月光の裏付によつて、より甘く、よりしなやかに窓にもたれるのであつた。さういふ時、かの女らが均しく感じることは、安つばいアメリカ物の映畫の最後のシーンに、必ず映出される新派悲劇的情緒であるのであつた。たとへば困難な世相と愛着とによつて纏れた人生が、やうやくに結婚といふところまでに辿りついたときに、あるひは海洋や山頂や河畔などにあしらつた月光を背景にした、いはゆる接吻のシーンを聯想せしめるところ

のものであつた。

それゆゑ彼女らは口々にいい月であることをほめたたへ、そして半洋風の着付のしたにふうわりと温かみをもつてゐる胸のなかで、幸福とか榮達とか結婚とか戀愛とかの、絶え間ない囁きを自分自身に取り交はすことによつて、その月光がいかに優美にうつるかといふことを證據立てるのであつた。なかには然ういふ妄想によつて寒雀のやうに痩せてゐるものもゐた。殆ど彼女らはひまさへあれば結婚や戀愛をゆめ見て益益はけしく痩せてゆくやうにも思はれてゐた。

さういふ時は殆ど彼女らの凡てが、れいの惱ましけなケンタッキー式な、あるひはニューヨーク式戀愛に毒されて、ひとしく窓にもたれてニーナの死や庭の千草などの甘いヴァイオリンのやうな聲で、誰が言ひ出すといふことなしに合唱するのが常であつた。

そして「あたし悲しいのよ。」と囁くのである。實際、さういふ時彼女らは悲しけ

にわざと眉根を曇らせ凡ての映畫にあらはれる有名な女優のやうに上眼をして、春や夏や秋の月をながめるのである。

大正十年六月一日印刷
大正十年六月四日發行

著者印



新興文藝叢書第十六編
鯉

定價金 八拾錢
送料金 六錢

著者 室生犀星

發行者 和田利彦
東京市日本橋區堀四丁目五番地

印刷者 植田庄助
東京市芝區櫻川町二十番地

印刷所 株式會社 大高印刷所
東京市芝區櫻川町二十番地

發行所 東京市日本橋區通四丁目
春陽堂
振替一六一七・電話本局五一

圖書目錄贈呈……往復葉書申込次第……春陽堂

■新興文藝叢書

■各冊金八拾錢
■郵送料各六錢

本叢書は新興文藝の精髓をよく一眸の下に
選集すると同時に、現下の文藝を知らんと
する人々の時間的、労力の煩を避けしめ
理的に統一のうちに我が文藝の内奥を窺はし
めんとするものなり。新しき藝術の力に觸
れんとする人は本叢書に就き、香はしく新
しき果實は、來たむに任せん。

(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)
■或る	■初	■小作人の死	■蒼き夜と空	■秋の歌	■波の上	■一握の藁	■鼻	■不幸な偶然	■葡萄園の中	■恩を返す話	■陸奥直次郎	■二つの途	■横田の戀	■漱石先生の死	■鯉	■草
朝志賀直哉	戀森田草平	小川未明	空谷崎精二	長田幹彦	上正宗白鳥	藁田山花袋	芥川龍之介	里見 弴	中有島生馬	菊池 寛	長與善郎	豊島與志雄	廣津和郎	久米正雄	室生犀星	吉田絃二郎

31
555

終

